

「特別の教科 道徳」における道徳的価値の刷新を可能とする授業実践理論の構想

樋口大夢（東京大学大学院教育学研究科 大学院生）

研究の背景と目的：「特別の教科 道徳」（以下、「道徳科」）における「考え、議論する道徳」では、特定の価値観を教え込まれて言われるままに行動するような子どもではなく、主体的に行動することができる子どもの育成に貢献することが期待されている。こうした動向を踏まえて本研究では、第二次世界大戦後のアメリカで活躍した政治理論家ハンナ・アレント（Hannah Arendt, 1906-1975）における *interest* に関する議論を起点にして彼女の道徳哲学論を検討し、その検討結果を踏まえてお茶の水女子大学附属小学校の「てつがく創造活動」の実践に焦点を当て、子どもによる既存の道徳的価値それ自体の刷新を可能とする道徳教育の授業実践の理論を提示することを目的とする。

研究方法：本研究は、（1）ハンナ・アレントの思想を検討する**理論研究**と（2）それを念頭に置きつつ行ったお茶の水女子大学附属小学校の「てつがく創造活動」の**実践研究**の二つから構成される。

（1）の理論研究では、アレントが論じる「興味・関心（*interest*）」を起点にして文献研究を進めてきた。研究を進める中でアレントの論じる「興味・関心」が、彼女の論じる政治的な営みである「行為」によって他者に対して開示される「人格的アイデンティティ」と、彼女が道徳哲学論の中で論じる「悪」についての考察の三者が密接に結びついていることが明らかとなった。（1）の理論研究では、アレントの「興味・関心」に関する議論を手がかりとして、「人格的アイデンティティ」の観点から彼女の道徳哲学論を検討し、「考え、議論する道徳」に対する一定の示唆を導き出した。

（2）の実践研究では、（1）の理論研究の成果を踏まえたうえで、お茶の水女子大学附属小学校の「てつがく創造活動」の実践と検討を行った。具体的には、「てつがく創造活動」で行われる子どもたちの対話と、対話後に行った児童と教師の話し合いを検討した。

研究成果と意義：アレントの議論において、人間の「人格的アイデンティティ」は、自己内対話としての「思考」とその「思考」に基いた「判断」を下して、他者との話し合いを含んだ政治的な「行為」をするときに他者に開示される。この「行為」は、話し合いをはじめとした「複数の人々のあいだ」で進行し、ここに人々の「興味・関心（*interest*）」が生じる。アレントの道徳哲学論では、「思考」と「判断」を通じて「人格的アイデンティティ」を形成した人は、「悪」を為す「誰でもない人」とは異なる、誰にも代替し得ない「不変の一者」として他者の前に立ち現われて政治的な「行為」をする。理論研究では、アレントの道徳哲学論における「思考」や「判断」は、政治的な「行為」とのかかわりで理解される必要があることが明らかとなった（理論研究の成果）。このことを踏まえて、「てつがく創造活動」の実践では、「プロジェクト」と題した子どもたちの活動の振り返りにおけるサークル対話における取組みに着目した。1年間の「プロジェクト」を通して子どもたちが振り返りのテーマに据えたのは「他人をあおることについて」であった。今回着目した児童は、「からかったりあおったりすることはいけないことだ」という議論の先を、この議論をあいだに介した（＝興味・関心を抱く）子どもたちと対話をすることを通じて、思考をして判断を下す、誰にも代替し得ない固有な存在としての“わたし”への理解を深めていったように思われる。「道徳科」の学習指導要領解説では、「自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え」ることの重要性が指摘されている。学習指導要領で示された活動を徹底させることで、「人格的アイデンティティ」を形成した子どもの育成に貢献することが期待される。ここにおいて重要なのは、子どもがただ単に「考え、議論する」のではなく、こうした活動を通じて「人格的アイデンティティ」を形成した「不変な一者」として他者の前に立ち現れることである。この時に特定の見方や価値観に偏った道徳的価値とは異なる価値を持った子どもが期待されることが明らかとなった（実践研究の成果）。もちろん、アレントにおける「思考」や「判断」と「てつがく創造活動」における子どもの思考や判断の間には、両者が政治と教育という異なる営みを対象としているため、断絶があることは認識しなくてはならない。しかし、近年、シティズンシップ教育などの観点から政治と教育を架橋することへの着目があることは見逃してはならない。また、道徳教育をシティズンシップ教育の観点から再考しようとする動向もある。以上のことを踏まえたとき、本研究がアレントの議論と「てつがく創造活動」に接点を見出し、新たな道徳教育の授業実践の理論を構想することに一定の意義を見出すことができる。

共同研究者：神谷潤（お茶の水女子大学附属小学校 教諭）、田邊尚樹（東京大学大学院教育学研究科 大学院生）